

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 20 年度派遣報告書
—インドネシア共和国、ハサヌディン大学、インドネシア語
派遣期間 (H21.12.16-H22.3.14) —

平成 21 年度入学
アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
下山 智輝

自身の研究テーマについて

一般に発展途上国では、急速な高学歴化に対して十分な雇用機会を提供できないために高学歴失業が生じると言われている。そこでは、学歴に対する雇用機会の質の相対的な低下によって労働市場への参入条件が高度化し、さらなる高学歴化を促すという構造が推測される。くわえて、雇用機会の質的格差がこの現象を助長する。

インドネシアにおいても約 10%の高失業率が維持されるなか、労働市場の高学歴化が進展している。なかでも首都圏ジャボタベックは、1980 年代以降の輸出志向工業化に伴う、一連の規制緩和政策を契機に、経済圏の拡大、機能分業をすすめた。そうした産業構造の変化、雇用機会の集中により、労働力の高学歴化がすすむのに対し、それに見合う質の雇用機会は不足している。

また、企業の雇用慣行は、基本的に空きポストへの需要に基づいており、一般求職者も含む開かれた労働市場から新卒者を採用している。そして、その過程では、学歴に対する一定のスクリーニング機能は認められているものの、労働生産性としての評価はシステム化されておらず、実務経験を優先する傾向にある。結果的に、企業の新卒採用枠数は、経済の動向によって不安定となり、新卒者の不完全就労、求職活動の長期化、高失業率といった問題の要因となっている。

以上より本研究は、インドネシア首都圏における大卒者の求職活動に着目し、企業の採用活動との比較を通じて、両者の学歴評価のズレを明らかにする。

研修言語の概要

インドネシアでは 500 以上の言語が使用され、うち 14 の言語は話者人口が 100 万人を越える。多くの人々は民族集団の言語、そして学校で学ぶ国語インドネシア語 (Bahasa Indonesia) とのバイリンガルである。西ジャワ州やバリ州などでは州全体がほぼ 1 つの言語コミュニティに相当し、地方語振興運動が盛んに行われる一方、ジャカルタを中心とする大都市には、インドネシア語しか解さない若者が増加する傾向にある。

語学研修の内容について

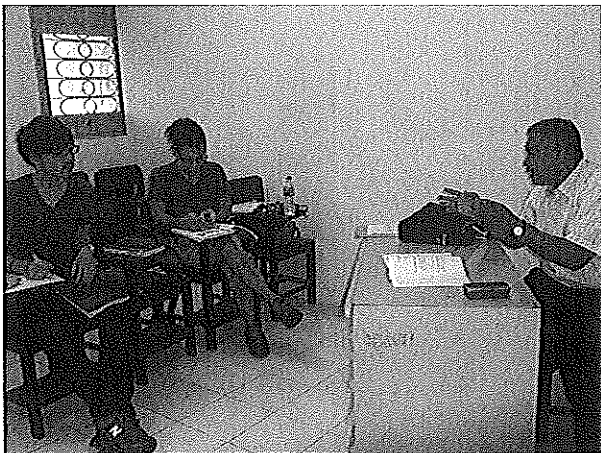
本研究は首都ジャカルタ近郊におけるフィールドワークを必要とする。主な調査対象は大学関係者や企業であるため、共通言語であるインドネシア語の基礎力向上を目的とし、研修に臨んだ。

派遣期間前半（12月～翌年2月）はスラウェシ島、マカッサルに位置するハサヌディン大学文学部での講義、後半（2月～3月）は調査地ジャカルタでのフィールドワークを通じての現地研修を行った。

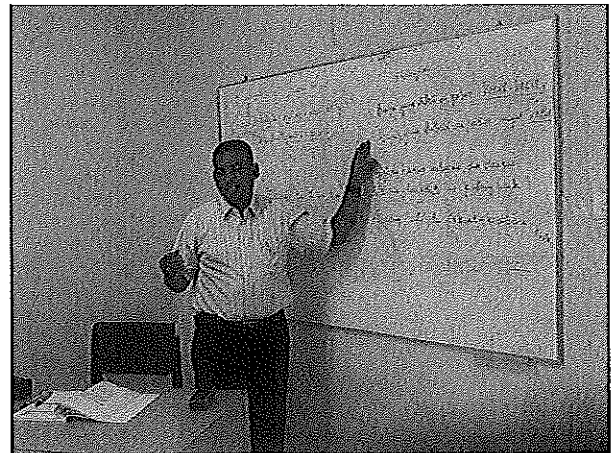
ハサヌディン大学における講義は、1コマ90分のなかで、文法や会話表現の基礎を学んだ。それ以外の時間の多くは、予習・復習を兼ねた自習に費やすこととした。

その際にまず、自国における学習環境との一番の違いは、学んだことをすぐにアウトプットできることと考えた。そして、同大学のフットサルサークルに参加し、積極的に会話をした。具体的には、会話の基礎である語彙力向上のために単語ノートを常に携帯し、サークルメンバーとの会話や、夕食後の字幕映画鑑賞から、使用頻度の高い、実用的な単語や表現を書きつけた。その語彙を用いて日記を書き、会話の中で用いることで、習得過程を循環化した。

後半のジャカルタ滞在中は、大学や出版社、役所などで研究を紹介する場面が多々あった。多くの方が根気よく耳を傾けてくれたおかげで、研究に関する会話にも自信をもつことができた。



【写真.1 講義の様子】



【写真.2 熱心に指導して下さいった Kahar 先生】

研修期間に印象に残った経験や体験

マカッサル滞在中に参加していたフットサルサークルは、インドネシア語を学ぶ私を暖かく迎え入れてくれた。試合の合間には何人かが教師役を買ってでてくれ、私に英語で話しかける者を嗜めるほど、熱の入った講義を行ってくれた。

しかし彼らはまた、ことあるごとに私にマカッサル語を教えようとした。マカッサルでは、日常会話にインドネシア語とマカッサル語が用いられており、私と同世代の者でも、少なくともその二言語は使いこなせるという。道端や店先で「せっかくインドネシアの、マカッサルに来たのだから」と言い、まるで土産のようにマカッサル語を一言教えられることもあった。私が正しく発音することが出来た時は、笑顔を向けてくれた。

今回、私は初めて現地で言語を学んだ。そして、会話の内容はもちろんのこと、使用する言語によって相手との距離が大きく異なることを体験した。今後も、会話の相手を想像しながら語学に臨みたい。



【写真.3 フットサル大会後の一コマ】

目標の達成度や反省点について

本研究は、その手法としてインドネシア語でのインタビュー調査、文献調査を必要とする。そのため、研修に先立ち、研究に関する語彙に重点を置いた会話力、読解力の向上を目標に設定した。

約3ヶ月の派遣期間を終え、日常会話、また研究の概要を説明できるようになったことが成果といえる。しかし、全体をとおして机上での勉強時間が不足しており、読解力に大きな進歩はなく、また筆記や会話では、定型文のように決まった表現で済ませてしまう場面があった。

特にジャカルタ滞在中は、フィールドワークと語学を両立することができず、マカッサル滞在時に学んだことを使用するに留まった。その点で、語学を集中的に学ぶ機会としてのITPを存分に活用できなかった。

今後は研究と語学、さらにフィールドワークと語学を両立する術を探りながら、今回の経験を活かしていきたい。